P.21～P.23（3ページ分）
8月5日21:27

小説の意味―『柳橋新誌』―

花田清輝

転形期においては、いっさいのものが、めまぐるしく移り変っていきます。古代から中世への転形期を生きた『方丈記』の作者は、「行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。」といいましたが、そんな感想が身にしみるというのも、われわれが、かれと同様、転形期を生きつつあるからでありましょう。

しかし、ひるがえって考えるならば、変れば変るほど変らないものがないとはいえません。たとえばヤコブ・ブルックハルトは、『イタリアにおけるルネッサンスの文化』のなかで、中世から近代への転形期を、一つの完結した世界として、永遠の相においてとらえようとつとめています。たしかに転形期には、転形期に特有の変らないすがたが、時や処をこ